

元版大藏經と刻工

——附・磧砂藏および普寧寺藏刻工一覽(稿)——

野 沢 佳 美

はじめに

筆者は前稿において、宋代の大藏經すなわち福州版(東禪寺藏・開元寺藏)と湖州版(思溪藏)の開板および補刻に関わった刻工について、とくにそれら三大藏經相互における刻工の関連を検討した。⁽¹⁾大藏經中の刻工は、開板の年代や地域がある程度特定されることから、書誌学の分野において版本の年代鑑定に活用されているが、大藏經相互における関連は省みられなかった。加えてこれまでの大藏經研究でも、刻工問題が論議されることはほとんどなかった。前稿ではこれらの点を踏まえ、まず宋版各大藏經に関連する諸資料の問題点を整理し、次いで各大藏經資料より得られた刻工データから三大藏經間の関連性を中心に考察を試みた。その結果、それらには比較的多く相互に共通している刻工の存在を確認し得た。ただ問題なのは、わが国に伝存する宋版の各大藏經が完成直後の印造ではなく、いずれもが数十年から百数十年後に印造されているという性格から、そこには原刻刻工と補刻刻工とが混在しているのであり、よってこの点を見極めた上で、その刻工を他の書籍の年代鑑定に利用しなければならぬのである。

ところで、南宋中期から元代にかけての浙西でも、二種の大藏經が開板されている。ひとつは平江府の磧砂藏であ

り、いまひとつは杭州南山の普寧寺藏である。両藏は太湖を挟んで相對置する地で開板され、その開板事業の時期もまた相前後している。これに加え湖州でも、北宋末南宋初に開板された思溪藏の補刻・追雕作業が南宋末の淳祐年間以降におこなわれているのである（後思溪藏）。このように浙西地域では大藏經の編纂事業が互いに平行・連続しておこなわれているのであり、してみれば思溪藏を含め、浙西における南宋中期から元代にかけてのそれら大藏經開板に関与した刻工も、相当数共通していることが予想されるのである。

元版両藏の刻工について、早くは川瀬一馬氏が西大寺所藏の磧砂藏『大般若經』刻工に着目し、さらにその一覽表を作成されているが、⁽²⁾両藏全般の刻工データを基に考察したものに北村高氏・楊繩信氏の成果がある。⁽³⁾とはいえ、たとえば本稿が論点とする元版両藏相互の刻工の関連については十分解明されているとはいえず、加えて中国人研究者のなかには磧砂藏に関連する資料の性格を正しく理解していないため誤解があるようである。

さいわい、わが国では近年元版両藏に関する調査報告書が相次いで公刊されており、本稿ではそうした報告書等の情報に基づき、元代に完成を見た両大藏經中の刻工を取り上げ、前稿に引き続いて同様な観点から刻工問題の一端を検討してみたい。

一、元版両藏の概略と関連資料の問題点

まずは元版両藏の概略と現存情況、さらに刻工一覽を作成する上での関連資料に関する問題点などを確認・整理しておきたい。

磧砂藏は、平江府（江蘇省呉県）の磧砂（または磧沙）延聖院において、南宋中期の嘉定九（一二二六）年より開板が開始された。当初、比丘了懃が杭州周辺の僧俗から施財を募り、『大般若經』の開板を開始したが、その作業は遅々

として進まず、その後皇族の趙安国が都勧縁大檀越となり、やがて広く僧俗にも施財を呼びかけ、了勲の事業を継続した。開板事業は南宋最末の咸淳八（一二七二）年ごろまでおこなわれ、およそ七五函分の仏典が開板されたが、宋元交替の混乱のなかで事業は一時中断された。南宋が滅亡し元朝の治下になると、至元二五（一二八八）年ごろより同院は復興され、寺額も延聖寺に昇格した。そして、大徳元（一二九七）年から磧砂藏の開板作業も再開され、併せて秘密部やその他の仏典の続刊入蔵（続蔵）があり、元末の至治年間（一三二一～一三三三）初に至り完成されたものごとくである。磧砂藏の大半は作業が再開された大徳年間以降のものであり、また従来の江南系藏經に見られない秘密部仏典などの続蔵が加えられたところに、磧砂藏を元版とみなす所以がある。

いっぽう、モンゴル軍の兵禍によって思溪藏の板木が焼失するや、大藏經の再刊が江南仏教界の名徳らによって企てられると、彼らは新興勢力である白雲宗教団に協力を求め、至元十四（一二七七）年より杭州南山大普寧寺に「大藏經局」が設置されて開板作業が開始され、同二七（一二九〇）年に至り完成した。これが普寧寺藏であり、編纂には杭州近辺の天台・慈恩（法相）・律・禅諸宗の僧が加わり、版式は思溪藏のそれを踏襲した。完成後も部分的な補刻がおこなわれ、大徳年間には秘密部仏典が追加され、さらに延祐（泰定）年間（一三二四～二七）にかけていくつかの仏典が続刊入蔵された。しかし、元末の混乱のなかで普寧寺藏の板木は寺とともに灰燼に帰したようである。⁽⁵⁾

さて元版両藏は、宋版の各大藏經と同様わが国に伝存している。⁽⁶⁾ことに普寧寺藏は盛んに日本に舶載されたりしく、こんにちまで各所に多く伝存している。これに対し磧砂藏はなぜか多くは伝存せず、後述のようにわが国では一蔵が確認され、また『大般若經』が数セット存するのみである。近時、かかる元版両藏に関する詳細な調査報告書が公開され、そこには刻工名も多数採録されているので、それらのデータに基づき、以下で両藏の刻工と関連資料の問題点をうかがってみよう。

まず磧砂藏であるが、中・日に伝存する遺品はごく少なく、わが国では武田科学振興財団杏雨書屋所蔵本（四八八八帖）が知られ、奈良県西大寺・同法華寺・宮内庁書陵部および滋賀県野藏神社には『大般若経』のみがそれぞれ蔵され、また宋版諸蔵や普寧寺蔵の補配として奈良県唐招提寺・同興福寺・同東福寺・埼玉県喜多院などに数十帖がそれぞれ蔵されている。このうちまとまって刻工名を収録した現存目録が作成されているのは、西大寺・法華寺・野藏神社の『大般若経』のみである。⁽⁷⁾これに対して中国では、民国二〇（一九三一）年に西安の臥龍寺および開元寺で磧砂藏が発見され、同二五（一九三六）年それらに基づく影印本が上海から『影印宋磧砂藏経』（六〇函、全五九一冊、首冊二冊）として刊行された。ただしこの上海版では欠けている箇所を普寧寺蔵・思溪蔵・永樂南蔵および単行本などで補配しているが、このことが後述のように刻工問題にも混乱を招く大きな要因となっている。のち台湾では上海版に基づいた『中華大藏経』が刊行され（第一輯、四一冊、一九六二―一九六五）、さらに台湾新文豊出版会社が上海版を洋装本として覆刊している（四〇冊、一九八七）。本稿では、この新文豊出版公司洋装本の磧砂藏を利用した。

以上の日・中の磧砂藏に関する調査報告書ならびに影印本などから多くの磧砂藏刻工を抽出することが可能となり、後掲のように現在までおよそ五〇〇名弱の刻工（二字以上の者）を確認することができた。しかしながら、磧砂藏自体の開板事情や影印本の性格から、その遺品に存する刻工を一概に、また無条件に磧砂藏の刻工として利用できない事情がある。

すなわち、先述のごとく磧砂藏は、南宋中期の嘉定九年から開板が始められ、『大般若経』をはじめとし南宋末までに七五函分ほどが開板されたが、宋元交替の混乱で事業は一時中断し、元の大徳年間以降に至り開板が再開された。このように磧砂藏は、中断期を挟んで前・後の二期に分かれて開板されていたのであり、このため一蔵中には南宋中（末期までの刻工（前期刻工））と大徳年間前後の刻工（後期刻工）とが混在しているのである。

また磧砂藏は、開板事業が再開された大徳年間以降、前期開板仏典に一部補刻が加えられている。前述のごとくわが国には西大寺・法華寺・野藏神社にそれぞれ磧砂藏本の『大般若経』が所蔵されているが、このうち西大寺『大般若経』（現存五九六帖）および野藏神社『大般若経』（現存五九七帖）は、南宋中・末期に開板された板木で印造されたものである（ただし印造時期は不明）。これに対し、開板事業が再開された大徳年間以降、前期開板の『大般若経』中の虫損や破損した箇所（一帖中、一部もしくは全紙）に補刻が加えられ、その板木で印造したのが法華寺『大般若経』（現存三三三帖）。解説文によれば、法華寺本はわが元亨四（一二三四）年に同寺に施入されたもので、元・至治元（一二三二）年の補刻関連の刊記があるというから、その間の印造）である。したがって、西大寺本・野藏神社本に確認される刻工は「前期刻工」であり、法華寺本中にはそれに加え補刻刻工として「後期刻工」も混在しているのである。

右のような「前期刻工」と「後期刻工」の混在に加え、磧砂藏でさらに重要なのは、述べたように影印本が他の蔵経本や単行本を補配として使用している点である。ところがこのことは、上海で影印本が刊行された当時でもあまり顧慮されていなかったようである。たとえば葉恭綽氏は「磧砂延聖院小志」（『考古』四、考古学社、一九三六）を発表され（上海版首冊にも収録）、延聖院の来歴、磧砂藏開板の経緯や組織などを述べ、併せて影印本中に確認される刻工四二三名のリストを作成している。ところが、影印本に当たり直してみると、四二三名の刻工のなかには補配として使用されている他のテキストの者も含まれていることが判明したのである。すなわち、葉氏が掲げた四二三名の刻工は純粹に磧砂藏の者ばかりではないのである。このような認識は、その後の中国人研究者にも継承されている。すなわち楊繩信氏は、磧砂藏中の『華嚴経』に確認される女性刻工を貴重な事例として取り上げられているが、楊氏が利用した前掲の上海版磧砂藏の『華嚴経』は、実は補配に利用された思溪藏本のテキストである。つまり楊氏もまた、影印本全体を磧砂藏と信じて疑わなかったようである。また一九八一年、西陝省扶風県法門寺の真身宝塔が倒壊した

さい、塔中から仏像などとともに開元寺藏十八卷および普寧寺藏五七九卷が発見された（その後、地下宮から唐代遺物が多数発見される）。これに関するいくつかの調査報告が公刊されているが、たとえばその第一報である「法門寺調査簡報」（『文博』一九八五・一六）では同寺発見の普寧寺藏中には六二名の刻工（姓名完備の者）が確認されるとし、そのうち二八名が磧砂藏中にも確認されると指摘する。しかし、同報告に掲げられた表の千字文に拠って影印本を確認すると、その仏典は磧砂藏本ではなく実は補配に利用された普寧寺藏本であった。同報告で利用した磧砂藏も上海版などの影印本であったかと推測されるが、影印本が磧砂藏以外のテキストを補配として使用していることに気づかなかつたか、または無視したため、かかる結果になったものと思われる。実際には六二名中、十一名の共通なのである。もっとも、普寧寺藏中の刻工に磧砂藏と共通する者が存在するという点を逸速く指摘したのは評価すべきであろう。さらに、近時刊行された瞿冕良編『中国古籍版刻辞典』（齐鲁書社、済南、一九九九）には宋元版大藏経中の刻工も多数収録され、彼らに関わった仏典や他の書籍名が列記されている。瞿氏が採録に利用した磧砂藏や普寧寺藏がいずれの所藏であるか典拠が示されておらず明らかでない。どうやら瞿氏は、磧砂藏に関して影印本（上海版もしくは台湾版）を使用されたい。瞿氏が磧砂藏刻工とされた者を影印本に当たり直した結果、上記の葉氏と同様に瞿氏もまた、磧砂藏の補配に使用されている普寧寺藏をはじめとした他のテキストの刻工を磧砂藏の刻工として認識しているのである。

以上縷々述べてきたが、ともかく磧砂藏中にはその開板経緯により「前期刻工」と「後期刻工」とが混在しているのであり、また影印本から得られたデータに基づいた資料には補配テキストの刻工までもが含まれているのである。よって、こうした磧砂藏刻工の性格を無視し、ことに影印本から得られる刻工データをただちに磧砂藏刻工として一概に扱うことはできないのである。筆者はこれまで諸資料から四九四名の磧砂藏刻工を確認しているが、上述のごとき磧砂藏の開板経緯や影印本の性格から、ことに影印本より刻工名を採録する場合、磧砂藏以外のテキストはもちろ

ん除外し、明らかに磧砂藏と判断される箇所のみ刻工名を収録し、これに西大寺・法華寺・野藏神社藏磧砂藏本『大般若經』などのデータを加えたのが、本稿末の一覽である。なお、磧砂藏は前・後の二期に分かれて開板されていることから、本一覽では西大寺および野藏神社本をはじめ、影印本でもその刊記などから明らかに南宋中・末期の開板に関わった「前期刻工」八八名の一覽「Ⅰ」と、それ以外の刻工（四〇六名）の一覽「Ⅱ」とに類別した。しかし一覽「Ⅱ」のなかにも、後述のように「前期刻工」がある程度含まれているのは確実である。

次に普寧寺藏についてであるが、前述のごとくわが国に伝存する元版大藏經の大半が普寧寺藏である。現在まとまって普寧寺藏が所藏されるのは、東京都増上寺・同浅草寺・岐阜県安国寺・滋賀県園城寺・奈良県東福寺・同西大寺・同般若寺の七か寺であり、また『大般若經』のみでは長崎県対馬の西福寺および妙光寺に藏される。このうち、刻工名を含む詳細な現存目録が刊行されているのは増上寺と西大寺の所藏本のみである。なお埼玉県喜多院にも、主体を成す思溪藏の補配として磧砂藏三九帖とともに普寧寺藏一七八九帖が現存し、刻工名も採録した『喜多院宋版一切經目録』（川越喜多院、一九六九）が公刊されている。しかしながら、本目録のデータには若干の問題があつて利用を見合わせた。この点は後述する。

さて増上寺には五四一八帖の普寧寺藏（以下、増上寺本と略）が所藏され、これについては『増上寺三大藏經目録（増上寺史料集別巻）』（増上寺、一九八二）が刊行されている。本目録には、他の二藏（思溪藏・高麗藏）とともに普寧寺藏の詳細なデータを採録した「元版大藏經目録」が収められ、また別冊として『増上寺三大藏經目録解説』が附される。増上寺本に欠落する仏典のデータは浅草寺所藏本によって補填している。増上寺本は、同『解説』によれば、徳川家康によって慶長十五（一六〇〇）年に召し上げられて同寺の有となり、それ以前の所藏地を特定することはできないが、周防の大内家と深い関係にあったようである。同「目録」では一帖ごとのデータが収録され、刻工名につい

ても詳細である。そして同『解説』によれば、「書体不明のものや実名と認めがたいものを除き、音通らしいものおよび姓名の省略を整理すれば、約四九九名」の刻工が確認されるという。

西大寺に所蔵される大蔵經（総現存数三五七五帖）中には普寧寺藏三四五〇帖が現存し（以下、西大寺本と略）、近時その詳細な『西大寺所蔵元版一切經調査報告書』（奈良県教育委員会、一九九八）が刊行された。西大寺本は同『報告書』の解説によると、康永三（一二三四）年に欠落した仏典を補填した旨の墨書があることから、十四世紀前半に同寺にもたらされたものという。ちなみに西大寺本の末部には、後述のように秘密部仏典が附加されており、それが増上寺本には存しないから、西大寺本は増上寺本よりあとの時期に印造されたことになる。同『報告書』では、西大寺本各帖の一紙ごとの刻工名が紙数番号を伴って表記されている。これにより、一帖のなかでどのような形で刻工名が表記されているのかをうかがうことができ、これもひとつの貴重なデータといえる。解説には刻工名の総数がしるされていないが、現存数から単純に判断すれば、西大寺本の刻工は基本的に増上寺本中にも確認されることとなる。しかしながら、西大寺本のみを確認できる刻工が存し、また増上寺本と西大寺本との目録間でおそらく同一人と思われる刻工を異なって認識（たとえば、鄭清「増上寺本」と鄭済「西大寺本」など）している事例もいくつか存する。

西大寺本のみを確認される刻工についてとくに注意しなければならないのは、「補刻」と「続蔵」の問題である。述べたように普寧寺藏は至元二七（一二九〇）年に完成されるが、増上寺本および西大寺本の解説でも指摘されるように、『華嚴經（八十華嚴）』巻第一の第二紙版心には「戊戌范山重刊」とある。「戊戌」は大徳二（一二九八）年と見られ、当該箇所が完成後に一部補刻されていることがわかる。ちなみに「范山」なる刻工は普寧寺藏の「大蔵經局刊字作頭」、すなわち刻工の総監督責任者のひとりであり、自身もその名を普寧寺藏中に刻んでいる。このほかにも、たとえば増上寺本中には字体を異にする箇所も存するというから、完成後に部分的補修がおこなわれたものと思われる。

る。また、般若寺所蔵の普寧寺蔵『大般若經』卷第三の卷末には、

南山大普寧寺大藏經局伏承「平江路崑山州積善寺都管僧德林施財刊開」大般若尊經壹卷功德報薦「先考吳小十承事先妣翁氏三娘子以資」冥福仍冀祝扶「乙丑本命元辰星君延洪祿算者」泰定二年二月 日当山主 明瑞 謹題

との刊記があり、⁽⁹⁾泰定二（一三三五）年に、少なくともこの一卷分の補刻が德林なる僧の施財によっておこなわれている。『大般若經』は作業開始直後の開板であるから、およそ五〇年後の補刻となる。泰定初の補刻がどれほどの規模であったか判然しないが、普寧寺蔵についても原刻刻工と補刻刻工の並存を注意しなければならない。すると、刻工名表記の現状（印字不鮮明や欠字）および調査漏れを除いて、増上寺本に存せず西大寺本に確認される者は補刻刻工であるのかも知れない。

この補刻とは別に、普寧寺蔵では大徳年間に秘密部仏典の追雕がおこなわれている。いま知られる普寧寺蔵の目録（四卷、大徳三年比丘如瑩題）では、最末部の『宗鏡録』一〇〇卷（済く感函）のあと武く遵函までは「計貳拾捌号秘密經、另有目録」と注記し、二八函分の秘密部仏典が追加され、その「目録」が別に存するとしている。しかしその「目録」は伝わらず、そこにどのような仏典が追加されたのか不明であった。⁽¹⁰⁾この追雕は松江府僧録広福大師の管主八によってなされたものであり、しかもその事業は同時期に磧砂蔵にも加えられ同内容の秘密部仏典が追雕されている。西安で発見された磧砂蔵中にこの秘密部仏典の一部が存し影印本に収録されて知られていたが、欠本が多くどのような仏典がそこに含まれるのか全容は不明であった。⁽¹¹⁾こうしたなかで、法門寺から発見された普寧寺蔵中にこの秘密部仏典の存していることが判明して学界を驚かしたが、しかし散佚が多くやはり詳細は不明であった。わが国でも、これまで各地に伝存する多くの普寧寺蔵に秘密部仏典はないとされてきた。しかし西大寺本に秘密部仏典の存することとはすでに指摘されていたのであり、⁽¹²⁾今般の調査によってその秘密部仏典二三部八〇卷（七五帖）の現状が明らかに

されたのである。詳細は前記『報告書』の解説に述べられているが、この秘密部仏典にも八名の刻工が確認される。彼らはいずれも至元十四（二七）年に開板された正蔵部にその名を確認できないから、続蔵追雕が別事業として営まれたことを示している。

以上のように普寧寺蔵についても、完成後に一部の補修や一卷全体におよぶような補刻が加えられ、またその末部に秘密部をはじめ続入蔵仏典が追雕されており、当然刻工問題についてはこの点を慎重に見極めなければならないようである。こうした点を勘案し、増上寺本や西大寺本その他の諸資料から普寧寺蔵開板に関わった刻工を集計し整理したのが末尾の一覧であり、目下のところ五三八名を確認している。このうち八名が続蔵（西大寺本秘密部）刻工であるが、補刻刻工については峻別がむつかしくその人物を特定することは困難である。しかし、続蔵刻工を除きここに集計された刻工のほとんどが原刻刻工、すなわち十三世紀後半の者たちと見て大過ないであろう。

前述のように喜多院には普寧寺蔵（以下、喜多院本と略）が一七八九帖現存しており、その目録も刊行されている。

刻工集計にとって貴重なデータではあるが、今回の刻工集計には利用しなかった。というのも、確かに一七八九帖のデータは魅力的であるが、今回の集計にあたりその目録に採録されたデータを同じ普寧寺蔵の増上寺本や西大寺本の目録と逐一照合させたところ、刻工名の一致しない帖が少なからず存在することが判明したからである。そして、その一致しない喜多院本の帖の刻工名を試みに影印本磧砂蔵の同一帖のそれと照合してみたところ、一致する帖が多く確認されたのである。つまり、喜多院本目録で普寧寺蔵として扱っている帖のなかには、実際には磧砂蔵が多数含まれているのである。喜多院本にしか確認されない刻工名も確かに数名存するが、如上の問題点から今回の集計では除外せざるを得なかった。⁽¹³⁾

二、元版両藏刻工の相互関係

以上において、元版両藏およびそれに関連する諸資料の問題点などを概観してきた。次に両藏の諸資料より抽出した刻工の相互関係について考えてみたいが、その前に両藏の開板経過をいま一度確認しておきたい。そのさい、冒頭で述べたように同じ浙西地域で、しかも時期的に重なり合う思溪藏の補刻事業、すなわち後思溪藏についても触れておかねばならない。

述べたように磧砂藏は、嘉定九年より平江府磧砂延聖院（のち延聖寺）において開板作業が着手されたが遅々として進まず、皇族の趙安国の援助によって事業が継続された。南宋最後の刊記は咸淳八年のものが確認されるから、その事業は南宋最末期までおこなわれていたらしいが、その後事業は一時中断される。元朝治下の大徳元年以降に至つてようやく作業が再開され、さらに秘密部や続入藏仏典の追雕がおこなわれ、至治年間には完成されたものと考えられている。いっぽう、太湖を挟んで対岸に位置する湖州の圓覚禅院では、北宋末南宋初に開板された思溪藏が南宋末の淳祐年間に皇族の趙与憲の援助を得て復興され（寺額は法宝資福寺に昇格）、併せて保管する思溪藏の板木の補修・補刻がおこなわれていた（後思溪藏）。後思溪藏には続藏四五〇巻が追雕されることになっていたようであるが、当時押し寄せてきたモンゴル軍の兵禍に遭って実現しなかったようで、しかも板木そのものもこの時ごとく焼失したようである。⁽¹⁴⁾そして元軍による臨安開城直後、後思溪藏の焼失を惜しんだ江南仏教界の名徳らが大藏經再刊を企て、その事業を新興勢力の白雲宗に要請した。こうして杭州南山大普寧寺に大藏經局が設けられ至元十四年ごろより開板事業が開始され、白雲宗勢力の全面協力のもと、普寧寺藏は至元二十七年に完成した。普寧寺藏にも大徳年間以降、秘密部および続入藏の仏典が追雕されている。以上の経緯を示したのが、次図である。

こうして見ると浙西地域では、これら三蔵の開板事業が相前後もしくは並行しておこなわれていることがわかる。すなわち、南宋滅亡以前では、磧砂蔵（前期）と後思溪蔵との両者間に作業が重なり、それ以後ではちょうど磧砂蔵の開板作業が中断している間に普寧寺蔵が開板され、その普寧寺蔵が完成されると磧砂蔵（後期）開板が再開されている。さらに大徳年間以降には普寧寺蔵と磧砂蔵の両者に秘密部および続蔵の開板・追彫作業が並行しておこなわれている。すると、かかる地域および時期が相互に密接な関係にあるのだから、それらの作業に参加した刻工にも少なからず共通性が認められて然るべきであろう。

そこで、本稿末尾の元版両蔵の刻工一覧、および前稿で提示した思溪蔵刻工一覧から相互に共通する者を集計したのが「別表」である。ここに集計された六一名の刻工のうち、まず注意されるのが三蔵に共通する徐秀・沈成・方広の三名の存在である。三名の一致というのは微妙であり同名異人の可能性もあるが、下図で確認した三蔵開板の时期的・地理的關係を考えれば、ありえないことではないと思われる。この三名が実際三蔵の開板に関わったのなら、下図から判断して、ひとつは磧砂蔵（前期）↓後思溪蔵（あるいは後思溪蔵↓磧砂蔵）↓普寧寺蔵の順、いまひとつは後思溪蔵↓普寧寺蔵↓磧砂蔵（後期）の順のいずれかであったと思われる。ただこの三名は、南宋中〜末期開板の西大寺・野蔵神社の『大般若経』や同期の刊記を持つ影印本には確認されないから、後者の場合であった可能性が高いことになる。しかしながら沈成は、いわゆる「景祐刊三史」

1216		1272	1297～	
平江	磧砂蔵（前期）			（後期、秘密部・続蔵、補刻）
湖洲	後思溪蔵			
杭州			普寧寺蔵	（秘密部・続蔵、補刻）
1240～50代？		？	1277	1290 1306～
南宋		1276	元	

元版大藏經と刻工

〔別表〕

刻 工 者	思 溪 蔵	磧 砂 蔵	普 寧 寺 蔵
王介		○	○
王桂		○	○
王祥		○	○
王玘	○	○	
王眉寿		○	○
王文貴		○	○
何浩		○	○
何光大		○	○
何通		○	○
魏信	○	○	
金友		○	○
金良		○	○
虞良(虞良中)		○	○
洪福		○	○
高桂	○	○	
黄文	○	○	
子華		○	○
朱子成		○	○
朱生		○	○
朱文		○	○
徐永		○	○
徐困		○	○
徐玉(徐伯玉)		○	○
徐堅		○	○
徐秀	○	○	○
徐進		○	○
徐仁		○	○
徐德卿		○	○
紹遠		○	○
葉元	○	○	
章祥	○	○	

刻 工 者	思 溪 蔵	磧 砂 蔵	普 寧 寺 蔵
章德祥		○	○
沈成	○	○	○
成玉		○	○
占閏(詹閏)		○	○
蘇潤		○	○
張子良		○	○
張仁甫(張仁父)		○	○
張千		○	○
張珍		○	○
趙宗	○	○	
趙必堅		○	○
陳榮		○	○
陳玉		○	○
陳玉泉		○	○
陳政		○	○
陳邦卿		○	○
陳明	○	○	
(三山)鄭埜		○	○
鄭林		○	○
范華		○	○
方広	○	○	○
方東		○	○
務云甫		○	○
(僧)明義		○	○
毛懋実		○	○
楊益之(楊益)		○	○
楊明	○	○	
李生		○	○
劉仁仲		○	○
凌桂		○	○

(北宋末南宋初刊)の『史記』『漢書』にもその名を確認できるから、思溪藏の沈成と元版両藏の沈成とは別人である(15)かも知れない。徐秀・方広については、いまほかに徴すべき情報はなく、それを裏付けることはできない。しかし述べたように三藏の地理的・時期的関係から、かかる三藏共通刻工の存在は全く否定されるものではないと考えられる。さて、磧砂藏と思溪藏との間に九名の共通刻工が確認される。すなわち王玘・高桂・黄文・葉元・章祥・陳明・楊明・趙宗・魏信である。このうち王玘・高桂・葉元・陳明・魏信の五名は西大寺・野藏神社『大般若経』にも確認される刻工であり、黄文・楊明・趙宗は南宋後半期および元代の他書に確認されるから、これら八名は磧砂藏(前期)(16)および後思溪藏に関わった南宋中・末期の刻工であったことはほぼ間違いないであろう。ただ章祥は、影印本では大徳六年の刊記を持つ帖に確認され、また後述のごとく大徳十一年の刊記を持つ帖に章徳祥がおり、章祥は章徳祥の略記したものとも考えられ、よって思溪藏の章祥とは別人である可能性が高い。

残る四九名は磧砂藏と普寧寺藏とに共通するが、この場合も二期に分けて考えねばならない。すなわち、前掲図から判明するとおり、磧砂藏(前期)のあと普寧寺藏の開板があり、普寧寺藏の完成後に磧砂藏(後期)の開板が着手されているからである。したがって、磧砂藏(前期)と普寧寺藏、それに普寧寺藏と磧砂藏(後期)のふたつのグループに分別せねばならないことになる。しかしながら四九名のうち、その活動時期が判明するのはごく少数である。すなわち朱生は西大寺・野藏神社『大般若経』に確認され、僧明義は咸淳元(一二六五)年の刊記を持つ影印本に確認されるから、ともに前者に属する刻工であったと思われる。また何通・金良は大徳十(一二三〇六)年の、章徳祥は大徳十一(一二三〇七)年の刊記を持つ影印本に確認され、さらに王文貴・陳邦卿は西大寺本の続藏仏典に確認されるから、ともに後者に属する刻工であったものと思われる。それ以外の者のなかには、書誌学データからおおよその活動時期が判明する者も何人か存するが、詳細は今後の検討に委ねたい。

以上、後思溪藏および元版両藏の三藏間における刻工の共通状況を見てきた。その結果、三藏間にはそれぞれ一定の共通刻工の存在を認めることができた。これは、地理的・時期的関係から当然の結果であるといえよう。ところで福州で相前後して開板された東禪寺藏と開元寺藏との間に六〇名余の共通刻工が確認されたことは前稿で触れたが、この点を踏まえれば、元版両藏のそれぞれの参加刻工数からすると、両藏間に共通する刻工は意外に少ないともいえる。これは、データ上の理由からか、あるいは元版両藏の事情からか、にわかに断じがたいが、元版両藏に関する資料や近年の調査報告の状況から、単にデータ上の問題ではないと考えられる。すると、元版両藏の開板事情に原因があるのではなからうか。そこでこの問題を、両藏の刻工に関する特徴からうかがってみよう。

まず磧砂藏刻工について。これまで幾度となく触れてきたが、磧砂藏の開板作業は前・後の二期に分かれておこなわれており、よって本稿では前期刻工（嘉定九年～咸淳八年ごろ）とほぼ特定できる者を一覧「Ⅰ」とし、その他の者を一覧「Ⅱ」として区別した。しかし一覧「Ⅱ」のなかにも、前述の黄文・楊明・趙宗のように南宋末までの刻工である可能性の高い者がある程度含まれている。

磧砂藏刻工でまずもって問題とせねばならないのは、やはりその開板事業に二五年余という中断期間がある点であろう。述べたように比丘了勲の始めた開板事業を継承したのが皇族の趙安国であった。しかし宋元の交替に伴う混乱のなかで、その事業は一時中断せざるを得なかった。事業の再開は二五年後となるが、この年数は刻工にとってもその生涯の活動期間とほぼ等しいことを考えれば、同一人で前期・後期双方の開板に従事した者はほとんどいなかったのではなからうか。⁽¹⁷⁾

また、刻工たちのなかには、地名を冠した者が散見される。これは彼らの本貫（出身地）をしるしたものと考えられる。一覧「Ⅰ」の刻工のうち、西大寺『大般若経』の刻工の出身地については、梶浦晋氏が版下書写人のそれと

もに検証されている。⁽¹⁸⁾この西大寺『大般若経』刻工も含めた一覽「I」で注意されるのは富沙・建人・建安・樵陽・武夷など福建の地名を冠する者が多いことで、その数は実に二八名（三二％）にのぼる。このうち高桂・葉元・魏信の三名は思溪藏刻工として確認されるから、彼らは後思溪藏にも関わった刻工たちであろう。前稿で確認したように北宋末南宋初において福州（東禅寺藏・開元寺藏）と湖州（思溪藏）との間を往還し、それぞれの大藏経開板に参加した刻工が存在したが、磧砂藏（前期）にも福建出身者が比較的多数参加していたのは注意される。これに對して、一覽「II」の刻工で福建出身であることを明示した者は、王祥・阮寅・阮仁・范生・翁蔣・傅云方にすぎない。⁽²⁰⁾彼らがすべて後期の刻工であるという確証はないが、それでも後期開板になると福建出身を明示した刻工の参加が極めて少なくなっているのは事実である。一覽「II」の刻工には、たとえば四明（鄞県）・宝婺（金華県）・平江（呉県）・南山（余杭県）・苕溪（烏程県）・三山（帰安県）などの地名を冠する者が若干いるが、その大半が出身地を冠していないことから判断すれば、彼らの大半は浙西、おそらくは蘇州や杭州近辺の刻工たちであったと思われる。

福建といえば、磧砂藏刻工（一覽「I」および「II」）のなかに、前稿で提示した福州版両藏の刻工（補刻刻工も含め）と共通する者が十四名ほど確認されるのである。すなわち子才・王志・呉才・李昌・范生・葉茂・張奕・陳生・陳文・陳用・陳和・蔡成・鄭寿・劉元である。もちろんこのなかには同名異人も含まれていようが、呉才・李昌・陳生・陳文・陳和・蔡成・劉元の七名は西大寺・野藏神社『大般若経』にも確認される（呉才は「行在」すなわち杭州の、陳生・陳文・蔡成・劉元は福建の、それぞれ出身者）。呉才以下七名はいまところ思溪藏中には確認されないが、このように福州版両藏と磧砂藏（前期）との間にも共通者がいるという事実は、呉才以下七名をはじめ彼ら十四名（すべてではないにせよ）も南宋中々末期ごろの刻工であったこと、福州版両藏中で彼らの名が確認される箇所は当該期の補刻であること、などを示すものといえよう。

以上を要するに、磧砂藏（前期）の開板ではとくに福建出身刻工が多く関わっていたが、大徳年間以降に再開された後期ではその参加が極めて少数となっていること、また磧砂藏刻工（とくには前期）のなかには、後思溪藏とともに福州版両藏の補刻にも参加する者がいたことなどが注意される点であり、これらは南宋中～末期における浙西と福建との間に刻工の移動が頻繁かつ密接におこなわれていたことを示すものである。

次に普寧寺藏の刻工について。筆者が諸資料より集計した普寧寺藏刻工は、いまのところ五三八名である。その大半が至元年間を中心とした時期の原刻刻工と見てよいと思われる。ところで北村高氏は、杭州藏すなわち普寧寺藏の刻工を取り上げられ、前記増上寺本の解説で普寧寺藏中の刻工が「約四九九名」確認されるということに対して、北村氏自身も集計を試みられ、「僧侶などを除外すると更に少なくなり、約三〇九名位とな」ったとされ、この三〇〇名余のなかで、ことに地名を冠した刻工を分析した結果、彼らのすべては福建・浙江・安徽・江蘇といった、元代の行政区画でいう「江浙等処行中書省」に含まれる地域の出身者であり、しかもそれらは出版業の盛んな地であったり、普寧寺藏開板を推進した白雲宗の勢力が強かった地方であった点を指摘されている。⁽²¹⁾

しかしながら、普寧寺藏中の刻工で最も注意しなければならない点は、実は北村氏が除外された「僧侶など」の存在にこそあるのではなからうか。普寧寺藏中の約五〇〇〇名のなかから北村氏はいわゆる「職人」としての刻工のみを取り上げられたようであるが、しかしその除外した「僧侶など」が実に二〇〇名近く存在しているのは、特異な状況なのではなからうか。磧砂藏ではその名から判断して、たとえば玘大師・忠大師・持上人・瑞大師ら数名の僧らしき刻工がいるが、版下の書写を担当した僧以外、僧を自称する刻工は明義ひとりである。さらに、湖州版（思溪藏）では法明が僧らしく思われる以外は確認されず、福州版（東禪寺藏・開元寺藏）ではその名から判断しても僧は確認されない。このように他の宋元版藏経では僧の刻工が存在しても数名程度であって、普寧寺藏刻工に二〇〇名近くの「僧侶

など」が確認されること自体、大蔵経開板史上極めて特異な現象といえるのである。⁽²²⁾

普寧寺蔵刻工のなかで、その名から僧であることが推測される者のほか、みずから僧・小沙弥僧・比丘などを自己の名に冠した姓名が多く散見される。たとえば前者では明隱・明永・明春などであり、後者では僧崇礼・小沙弥僧嚴明崇・比丘崇礼などである。さらに注目されるのは、優婆塞丘崇彬・優婆塞沈明證・優婆塞俞明春・姑蘇優婆塞秦明入など、在家信者を意味する優婆塞を冠する者も散見されることである。北村氏が指摘される「僧侶たち」には、かかる刻工も含まれているものと思われる。これら僧および在家信者とおぼしき刻工を集計し整理してみると、その数は北村氏の集計ほど多くはないものの、やはり百数十名を越える者の存在が確認されるのは事実である。ところでそれら僧侶などの刻工のなかに妙な共通点のあることに気づかされる。それは、右に引用した刻工からも明らかのように、その名に「明」字と「崇」字を持つ者が圧倒的に多いことである。普寧寺蔵開板の依頼を受けて、白雲宗では古山道安が中心となり事業が進められたが、その道安の直弟子が「如」字を、孫弟子が「明」字を、曾孫弟子が「崇」字をその僧名に用いていることが指摘されている。⁽²³⁾ 普寧寺蔵刻工中に頻出する「明・崇」字をその名に用いたこれら刻工は、開板を推進した白雲宗の僧および在家信者だったのではなからうか。すると白雲宗は、普寧寺蔵開板の事業組織・経済援助のみならず、開板作業そのものにも関与していたことになる。加えて、西大寺本中には如堅なる刻工が唯一確認される。彼が道安の直弟子のひとりであるとすれば、道安の弟子および信者が実に三代にわたって刻工として多数従事していたのである。さすれば、普寧寺蔵開板に動員された刻工のなかで、いわゆる「職人」としての刻工の参加数はおのずと少ないものとなるのであり、ここに普寧寺蔵刻工の特徴が現れているといってよい。この点は、普寧寺蔵の開板経緯や性格を考える上でも重要な事項であるので、詳細について別に考えたい。⁽²⁴⁾

先に磧砂蔵と福建出身刻工との関係を取り上げたが、普寧寺蔵ではどうであろうか。普寧寺蔵刻工として集計され

たなかで、福建の地名を冠するのは王祥と余生のふたりだけであり、ともに建安の出身である。北村氏も指摘されるように、このふたりはしばしば同じ帖を開板している。また、普寧寺藏中の刻工のなかにも福州版（東禪寺藏・開元寺藏）刻工と共通する者が十二名確認されるのである。すなわち王圭・林盛・林茂・葉清・張生・陳永・陳昕・陳昌・陳震・陳正・鄭清・鄭文である。彼らの具体的検討は他日に期したいが、書誌学データに徴すれば、ここに挙げた者のうち数名は南宋初・中期刊本に確認され、あるいは宋版の元代補刻刻工として確認されるから、大半は同名異人の確率が高いようである。このように普寧寺藏中にも福建出身刻工が若干存在するが、それは磧砂藏（前期）の場合に比してごく少数であり、また福州版二藏との関係はほとんどなかったもののごとくである。この点もおそらくは上述したように、刻工のなかに白雲宗系の僧や信者が多数関係していることと無縁ではないであろう。

以上、元版両藏および後思溪藏の三者間に共通する刻工の問題を考えてきた。述べたように磧砂藏（前期）開板作業の中断後、普寧寺藏が開板され、その完成後に磧砂藏（後期）の開板が開始されているという時間的経緯に、三藏の開板地の地理的位置関係を考え併せれば、ことに磧砂藏と普寧寺藏との間にはいま少し共通刻工の存在する可能性があつて然るべきであろう。ところが実際には、元版両藏に参加した刻工数から考えても決して両者の共通刻工が多いとはいえない。これは磧砂藏の開板作業が宋元交替期に二五年余も中断しており、また前期と後期とでは参加した刻工について福建との関連で質的相違が見受けられる。普寧寺藏は磧砂藏の中断期に開板されていたが、それに参加した刻工のうち百数十名は白雲宗系の僧および信者と考えられ、このためいわゆる「職人」としての刻工の占める割合が低かったのである。こうした元版両藏の開板に現れた特徴が影響しあい、両藏でそれぞれ五〇〇名ほどの刻工が従事していたにも関わらず、意外と共通刻工が少ない結果となったのではなからうか。

おわりに

前稿に引き続いて本稿では、元版両蔵に参加した刻工問題を取り上げ、磧砂蔵および普寧寺蔵の開板に関わる経緯と諸資料の問題点とをまず確認し、次いで元版両蔵に関する諸資料から抽出した刻工データの結果を、同じ浙西では同時期に補刻が加えられていたいわゆる後思溪蔵のデータとも照合し、南宋中期以降元代に至る浙西地域における三蔵相互での共通刻工に関わる諸点を中心に検討してきた。いまそれをここで繰り返さないが、わが国に遺存する元版大蔵経の大半が普寧寺蔵であり、近年ようやく詳細なデータを収録した複数の目録類が刊行され、研究環境は格段の進展を見せている。磧砂蔵についてはさいわい西大寺および野蔵神社の『大般若経』報告書があるが、その他の箇所は影印本に頼らざるを得ない状況にある。しかし、その影印本自体に種々の問題点が存し、よって刻工データも含めた磧砂蔵の詳細な情報は、決して満足できるものではない。ともかくわが国には未調査の元版大蔵経の遺品が多く存し、今後そうした遺品が調査され、情報が公開されれば、そこには本稿で述べた諸点につき、訂正もしくは補強するデータが多数存在するものと期待される。その日を鶴首して待ちたい。

ところで冒頭にも触れたように、宋元版大蔵経中の刻工名は、その性質から書誌学の重要な情報源となっている。確かに開板地・開板年代がほぼ特定できることから、他の書籍の年代鑑定に大いに役立つことは否定できない。しかしながら、前稿および本稿での考察で痛感させられたのは、その大蔵経が完成直後の印造か否かということが、そこに確認される刻工名にも大きな影響を与えている点である。すなわち補刻の問題である。開板直後の印本であるならば、そこに確認される刻工名も原刻刻工として取り扱えるが、板木は年数を重ねていくうちに虫損や破損、摩滅による害を被り、そのため板木の補刻・補修が繰り返されるのである。それが版本の宿命である。まして大蔵経はその完

成まで数十年を要する大事業であるから、作業開始当初の仏典の板木はその藏經の完成される以前にすでに補刻を加えられる場合もあるのである。大藏經中の刻工名といっても、他の一般書籍と同様に実はかかる問題を抱えているのであり、この点を顧慮しないで無条件にそのデータを活用することは危険があるのである。⁽²⁷⁾ もちろん一般書籍に比べ比較にならぬほど多数の刻工を確認できるというメリットを印刷大藏經は有しているが、しかしそれをそのまま無批判に利用するのではなく、これまで調査・報告されている宋元版書籍の刻工データと比較照合しながら、その刻工の活動時期や地域を丹念に特定するという作業が、今後必要となるのである。

註

- (1) 「宋版大藏經と刻工―附・宋版三大藏經刻工一覽(稿)―」(『立正大学文学部論叢』一一〇、一九九九)。
- (2) 「西大寺藏趙氏一力刊行の南宋版大般若波羅蜜多經」(『椎園』四、一九三八)。
- (3) ①「元代杭州藏の刻工について」(『龍谷大学論集』四三八、一九九一)、②「元朝の非漢字文字―磧砂版大藏經の刻工名より―」(『神女大史学』八、一九九一)。なお、北村氏はこれらの論考に先立ち、③「上海古籍出版社刊行の『経律異相』の版本について」(『東洋史苑』三四・三五、一九九〇)を発表されており、後述する影印版から単行された、南宋版磧砂藏と銘打った上海古籍出版社刊行の同仏典の開板時期について、その刻工の分析から実は元・大徳年間刊行の磧砂藏本であることを論証されている。本論考のなかで北村氏は、普寧寺藏と磧砂藏との間に共通刻工の存在する点を指摘され、この問題については「別稿を用意している」と注記されている。本稿の内容と大いに重なる論点を北村氏も早くに注意されているが、残念ながらここにちまでその「別稿」は公にされていない。
- (4) 「從『磧砂藏』刻印看宋元印刷工人的幾個問題」(『中華文史論叢』一九八四―一、一九八四)。
- (5) 以上の元版兩藏の概略については、おもに次の文献を参照した。大藏会編『大藏經―成立と変遷―』(百華苑、一九六四)、中村菊之進「磧砂版大藏經考」(一)〜(三)、『密教文化』一八四〜一八六、一九九三〜一九九四)、および前掲註(2)川瀬氏論文、前掲註(3)北村氏①・②論文など。さらに、後掲の元版兩藏に関連する近年の目録および調査報告書(『増上

寺三大藏經目錄（増上寺史料集別巻）』・『西大寺所蔵元版一切經調查報告書』などに附せられた解説、とくには竺沙雅章「元版大藏經概観」（『西大寺所蔵元版一切經調查報告書』所収）を大いに参考とした。

(6) 以下、わが国に伝存する元版兩藏の所蔵者・現存数などについては、梶浦晋「日本現存の宋元版『大般若經』——剛中玄柔将来本と西大寺藏磧砂藏版を中心として——」（『金沢文庫研究』二九七、一九九六）に記載されたデータに拠った。

(7) 西大寺磧砂藏『大般若經』各帖のデータは『奈良県大般若經調查報告書（一）資料篇1』（奈良県教育委員会、一九九二）に収められ、その解説は『奈良県大般若經調查報告書（一）本文篇』（奈良県教育委員会、一九九二）の十二、十八頁（梶浦晋氏執筆）に収録される。法華寺のそれは『奈良県大般若經調查報告書（二）資料篇2』（奈良県教育委員会、一九九五）に収められ、その解説は『奈良県大般若經調查報告書（二）本文篇』（奈良県教育委員会、一九九五）の六八、七二頁（梶浦晋氏執筆）に収録される。野藏神社のそれは『滋賀県大般若波羅蜜多經調查報告（一）』（滋賀県教育委員会、一九八九）に収録されている。

(8) 前掲註（4）同論文、四五、四七頁。

(9) 同刊記の書影・録文は、『重要文化財般若寺經藏修理工事報告書』（奈良県教育委員会、一九七三）、『般若寺民俗資料緊急調査報告書——小仏像・板木——』（元興寺文化財研究所、一九七九）に収録されている。

(10) 管主八については、小野玄妙「元代松江府僧録管主八大師の刻藏事蹟——大普寧寺本以外の元版藏經特に管主八僧録の刊本に就いて——」（『仏典研究』二一十三、一九三〇）、小川貫式「太原崇善寺新出管主八の施入經と西夏文大藏經の殘葉」（『支那佛教史學』六一一、一九四二）を参照。

(11) 前掲した調査報告第一報の「法門寺調査簡報」など。なお、李富華「法門寺發現的《普寧藏》秘密經及其統補問題」（『世界宗教研究』一九九三——一九九三）がある。

(12) 『奈良六六寺大觀 第十四卷・西大寺』（岩波書店、一九七三）の山本信吉氏解説（二〇〇—二〇一頁）。

(13) 以上は喜多院本の刻工名を他の藏經と照合することによって、その種別に疑問を抱くこととなったが、このほど刊行された『西大寺所蔵元版一切經調查報告書』中にも同様な問題点が存するようである。すなわち、同『報告書』では普寧寺藏本として扱われている『仏說瑜伽大教王經』巻第五（輦五、二四六—二四七頁）の刻工は「楊椿」であるが、増上寺本同仏典の当該箇所刻工は「章暹」である（『元版大藏經目錄（増上寺三大藏經目錄）』、二七九頁）。楊椿なる刻工は、西大寺本や

増上寺本では一例も確認されない人物である。どうやら彼は、普寧寺蔵開板に關与していない刻工のようである。ところで、試みに影印本磧砂蔵の同仏典当該箇所（台灣版洋裝影印本第三三冊、一九六頁下段）を確認してみると、卷第五第一紙の版心には確かに「楊椿」の名が認められるのである（ちなみに楊椿は同仏典を含め影印本の十一帖に確認される）。つまり、西大寺本で普寧寺蔵として扱われている同仏典は、刻工名から判断すれば磧砂蔵と断定せざるを得ないのである。西大寺本中には磧砂蔵五帖（宋代一帖と元代四帖）も混配されており（前掲同『報告書』）、同仏典が磧砂蔵であってもなんら不自然ではないのである。卷首や卷末に刊記や題記などがあればもちろん種別の判断は容易であるが、元版兩蔵のように版式が類似している場合、判別が困難な時もある。すると、先の喜多院本やいま述べた西大寺本の事例のように、種別を判断するにさいし、そこに刻工名が確認される場合、積極的に刻工名データを比較検討に利用し、判断基準のひとつとすべきなのではなからうか。

(14) 小川貫式「思溪圓覺禪院と思溪版大藏經の問題」〔龍谷學報〕三三四、一九三九を参照。

(15) 尾崎康『正史宋元版の研究』（汲古書院、一九八九）、五〇、一七四、二三四頁。

(16) 阿部隆一「宋元版刻工名表」〔阿部隆一遺稿集 第一卷（宋元版篇）〕、汲古書院、一九九三、など。

(17) 前掲註(15) 尾崎氏同書、五三頁。ただ尾崎氏は同書のなかで、刻工の活動時期について「考えられるいっばいの範囲」として、「四〇年」とも述べられている（同書、三三〇頁）。

(18) 前掲註(7)『奈良県大般若經調查報告書（一）本文篇』の解説である「調査概要」の3. 西大寺「磧砂版大般若經刊記等記載地名一覧」（十七〜十八頁）。

(19) 前掲註(18)の梶浦氏の検証にはこの「樵陽」は含まれていない。高桂や高正が冠するのは樵陽・武陽・樵川などの地名であるが、これは『八閩通志』卷二・地理・郡名の邵武府の条に「……武陽 本志…以郡在武夷之南。樵川 以郡有樵溪。樵陽 同上。」とあるように、邵武の別名である。

(20) ここに挙げた事例のうち、「翁蔣」は同一人物の姓名を表したものであると思われず、「翁」と「蔣」の二人の姓を併記したもので、彼らが協同で同一板を開板したものであると考えられる。磧砂蔵中には同一帖のなかに二名連記した事例がいくつか確認できる。すなわち「胡昶胡壇刊」〔大乘莊嚴經論 卷第八〕、「王泉陳榮」〔仏藏經 卷第三〕、「王泉陳振老」〔弥勒菩薩所問經論 卷第四〕などのごとくである（普寧寺蔵中にも二、三の例あり）。おそらく両者は師弟關係にあり、上の「師」

が下の「弟子」を「教育」しながら開板したものではあるまいか。なお、一般書籍のなかで一葉に数名連記の刻工の存在する点を出版者との関係から考察したものに、長沢規矩也「刻工と出版者との関係」(『長沢規矩也著作集 第三卷(宋元版の研究)』、汲古書院、一九八三、二一五～二一八頁)があるが、かかる事例は刻工の実態解明という面からも今後検討を加えねばならない。

(21) 前掲註(3) 北村氏①論文。

(22) 張秀民氏によれば、書籍の開板に僧侶が関わるようになったのは金代からであるという(『中国印刷史』、上海人民出版社、一九八九、七四〇～七四一頁)。ただし張氏は同書において、元版両蔵の刻工について触れるところはない。

(23) 小川貫式「元代白雲宗教団の活躍」(『仏教史学』三一、一九五二)、十五頁。

(24) この問題については、別稿「元代普寧寺蔵と刻工」において詳しく論ずる予定である。

(25) 前掲註(3) 北村氏①論文、一二五頁。

(26) 前掲註(16) 阿部氏「宋元版刻工名表」。

(27) 書籍中の原刻と補刻の峻別の重要性について、すでに尾崎康氏が「宋版鑑別法」(『ビブリア』八五、一九八五)のなかで強調されている(十六頁)。

磧砂蔵および普寧寺蔵刻工一覧(稿)

凡例 ①この一覧は、元版大蔵経すなわち磧砂蔵および普寧寺蔵に関係する影印本・現存目録・調査報告書などに著録された

それぞれの刻工名を、他と比較可能な二字以上の者をリスト化したものである。

②磧砂蔵の刻工者は、西大寺『大般若経』本(『奈良県大般若経調査報告書(一) 資料篇1』、奈良県教育委員会、一九九二)、法華寺『大般若経』本(『奈良県大般若経調査報告書(二) 資料篇2』(奈良県教育委員会、一九九五)、野藏神社『大般若経』本(『滋賀県大般若波羅蜜多経調査報告(一)』、滋賀県教育委員会、一九八九)、影印本(『宋版磧砂大蔵経』四〇冊、新文豊出版公司、台北、一九八七)、および川瀬一馬「西大寺蔵趙氏一力刊行の南宋版大般若波羅蜜多経」(『椎園』四、一九三八)などによった。なお、南宋中～末期の開板に関わったことが明らかな者八八名を一

覧「I」とし、それ以外の者を一覧「II」として分載した。

③普寧寺蔵の刻工者は、増上寺本（『増上寺三大蔵經目錄（増上寺史料集別卷）』、増上寺、一九八二）、西大寺本（『西大寺所蔵元版一切經調查報告書』、奈良県教育委員会、一九九八）などによった。

④一覧中、刻工名に付せられた（ ）内はその刻工の別記表記を示し、また「」内はその刻工に冠せられた地名などを示している。

⑤磧砂蔵刻工一覧「II」で、傍線を付した者は、刊記などから明らかに大徳年間以降であることが判明した刻工を示している。

⑥普寧寺蔵刻工一覧で姓名を で囲んである者は、西大寺本の統蔵仏典に確認される刻工を示している。

⑦各刻工名一覧の配列は、姓の画数順とし、判読不能な字は◇で示した。なお目錄等によっては、同一人物と思われる者を異なった表記で記載している場合があるが、明らかに誤認していると判断された事例以外は、本一覧ではその目錄ごとの表記に従った。

【磧砂蔵刻工一覧「I」】

丁椿年、王古、王瑞「玉峯」、王盛璿（王盛）「海門」、王珙、方至、方信、尤文光、朱杞、朱梓「嘉定県・余杭県」、朱生「建人」、朱坦「余杭」、朱祐、何九万、阮寶、沈起宗、沈宗「平江」、余元「建安」、余濟、余才「富沙」、余仁、余仁仲、李奇「建安」、李建、李昌、李千、金忠「平江・姑蘇」、吳才「行在」、吳祐、周松、林仲卿、南海人、俞大昌、翁困、翁森「福建・建安」、翁遂「建安」、翁川、高桂「樵陽・長源・武陽・樵川」、高才、高正「樵陽・樵川」、徐珙「平江」、徐珣「顧水・嘉定県」、馬忠、凌祖、凌宗、黄雲（黄云）「建安」、黄埜、葉元「建安」、陳士（陳仕）「建安」、陳秀、陳生「建安」、陳彬「錢塘」、陳文「建安・武夷」、陳明、陳和、婁拱、傅郁、傅岩「建安府」、傅上「建寧府」、傅必上「武夷」、傅必方、傅方「建安」、游謙、游仁「建安」、游明「建人」、樓拱、賈裕「平江」、蔣榮祖「平江、本府」、

蔣興祖「中吳·平江府」、蔣嗣宗「平江」、詹采「行在」、詹昌、詹世采、蔡進甫（蔡進父）「建安」、蔡成「建安」、蔡甫「建安」、蔡友「玉清」、熊賡（熊庚）「建寧府」、慧顯、劉元「富沙·建人」、劉世興「建安」、劉宗顯、劉得中（劉中）「天台」、劉寧「建安」、劉孚、劉和甫（劉和）「建人·建安」、魏信「建安」、龐汝霖、

【磧砂藏刻工一覽【二】】

丁日新（丁日辛）、弓華、弓君壽、弓師古、弓日華（龔日華）、弓仁之、子華、子才、子難、子良、尹一清（尹一青）、尹秀、尹秀涯、尹秀之、王婦「四明」、王榮、王介、王桂、王啓、王元之、王高、王興、王志、王之遇、王神通、王子祥、王子芳、王祥「建安」、王森、王寧、王眉壽、王森、王富（王富）、王文貴、王文斌、王明正、王埜、仁甫、中安、文郁、文益、文玉、文卿、文俊、方云、方榮、方桂山、方景明、方広、方琇、方仲卿、方東、毛懋實、友益、玉泉、史伯泰、占閏、占成、休九万、朱起、朱輝、朱義、朱君才、朱君實、朱行可、朱子盛、朱子成、朱志道、朱秀岩、朱勝、朱仲安、朱德鄉、朱文、朱文妙、朱文明、朱宝由、朱明、朱明貴、朱明之、成玉、成之、仲鄉、仲文、仲明、仲良、任韋、任存忠、有常、應云卿、應貴卿、應子華、應執善「宝婺」、應秀、應俊卿、應大有、應挾之、應仲卿、應仲斌、應庭熙、應明卿、應茂之、應有、汪惠、汪德亮、汪明正、何永言「古吳」、何永津、何益之、何遠山「郡人」、何君實、何屋、何浩、何光大、何子敬、何日、何俊、何信、何津「平江」、何信之、何祖、何宗、何通、玘大師、阮寅「建安」、阮仁「建安」、阮明「奉川」、壽之、沈秀、沈成、沈珍、沈道、李永甫、李君祥、李壽、李生、李文卿、李宝、良進、季日新、金真、金大明、金珍、金德明、金末、金友、金良、姑志、吳道、国才、秀岩、周濟、周秀、周忠、周中、周利、周良、邵宗夏、邵宗亮、邵德昭（邵應昭）、齊一、齊德茂、齊明、齊明二、宗采、忠大師、范榮、范華、范華甫、范生「建安人」、范仲良、范茂卿、茅文、茅文龍、明義（明义）「僧」、明沈、明喆、茂之、孟文俊、

姜成之、姜文茂、胡壇、胡慶、胡惠、胡徐、胡勝、胡仁、胡詵、胡昶、胡祐、洪福、持上人、信之、施沢、風牛、俞
 榮、俞盛、俞文、俞甫、俞明、姚友益、益一、益之、翁（公）隱之、翁榮、翁実甫、翁舜卿、翁蔣「福建」、翁（公）
 勝之、翁仍老、翁子和、翁信之、翁寧、婦伯通、惠日、高益之、高能、時宗亮、時忠（時中）、徐允升、徐禹王（徐
 禹玉）、徐泳、徐永、徐困、徐玉、徐君、徐君宝、徐堅、徐香、徐子、徐寿、徐秀、徐俊卿、徐進、徐信、徐侑、徐
 仁、徐進卿、徐信之、徐正、徐成、徐大有、徐仲文、徐德卿、徐夢、徐夢龍、徐友益、徐友岩（友岩）、徐友山（友
 山）、徐和甫、孫允中、孫漢甫、唐可敬、陶桂岩、莫祖、柳宗亮、凌桂、黃昇、黃斌、黃文、黃文斌、勝安、勝之、
 葉婦生、葉茂、葉茂成、葉埜、紹遠、章祥、章著、章德祥、章文、章文郁、章文桂（章桂）、章明、崇玘、盛元吉、
 盛秀、盛道、盛富、曾元亨、曾寿之、曹益之、曹子清、張奕、張子垕（張垕）、張寿、張秀、張子良、張仁父（張仁
 甫・張仁）、張千、張作、張宗信、張珍「南山」、張文鎮（張文・張鎮・南山張）、陳一清（陳一真）、陳允升、陳榮、
 陳觀仁、陳玘◇、陳吉、陳玉、陳玉泉、陳敬之、陳桂孫、陳厚、陳国才、陳子厚、陳子仁、陳日、陳日裕、陳寿、陳
 琇、陳小郎、陳仁、陳新之、陳仁甫、陳振老、陳政、陳世亨、陳正甫、陳太原、陳大昌、陳大用「苕溪」、陳侗甫、
 陳德、陳德甫、陳邦祁、陳邦卿、陳包采、陳芳叔、陳祐之（陳右之）、陳用、陳用和、陳雷、陳来升、得甫、婺仁、
 婺潘、務云甫、務陳、董大有（董大友）、道達、傳云方「建安」、傳玉方、傳盛、馮椿、福鄭、無着、裕明、游和、賈
 成、賈珍、蔣可、蔣秀、蔣達、蔣富（蔣富）、蔣保、蔣無碍（蔣无碍）、瑞大師、楊益之（楊益）、楊采、楊秀岩、楊
 春、楊清、楊青、楊清之、楊石山、楊椿、楊明、楊裕、虞桐、虞良中（虞良・于良）、蔡泳之、錢潤、趙堅、趙宗、
 趙必堅、趙良、趙良富（趙良富）、趙良甫、德清、熊道瓊、毅甫、鄭益、鄭寿、鄭升、鄭大寿、鄭茂之、鄭林、鄭
 「三山」、滕吉甫、滕秀、滕文榮、潘君玉「宝婺」、潘用、劉仁仲（劉仁中）「広陵」、謝君明（君明）、謝天寄（天寄）、
 謝天記（謝天驥・天記）、盧子才、魏秀、魏明、蘇秀、蘇潤、羅茂之、龔華

【普寧寺藏刻工一覽】

一之、一真(乙真)、了真、才昌、三江、子華、子京、子之、子秀、子成、子青、小国、小大師、小道、小林、千七、大昌、万三道(万三)、王介、王喜、王吉寿、王圭、王桂、王公、王高迁、王圣、王寿、王春、王祥(王祥人)「建安・臥泳」、王申之(申之)、王聖寿、王眉寿、王符、王文貴、王燁、月堂居士、元吉、元中、公正、仁冲、天祐、文公、文宝、文茂、方永祥(永祥)、方景◇、方堅、方広、方昇「嚴陵」、方崇祥、方千、方千二、方大昌、方東、毛宜之、毛梓、毛秀、毛宣之、毛懋実(毛夷・懋実)「禹山」、尤有明(尤有・尤明)、六四、永光、永定、永良、加禾真、丘七、丘崇彬「霽川・小道・優婆塞」、丘明彬(丘彬)、玉山、正玉、占得、平行、礼因、安国、吉甫、伍于、伍琇「括蒼」、伍秀、江輝、光子栄、自南、朱永定、朱貴、朱鈺、朱元、朱光、朱庚、朱思義、朱志堅(志堅)、朱子成(朱子晟)、朱子珍、朱思明(思明)、朱昇、朱昌、朱進、朱仁、朱崇瑛、朱崇俊(朱俊)、朱崇正(崇正)、朱崇定、朱崇旻(崇旻)「孤蘇」、朱成、朱生、朱大明(朱明)、朱達、朱珎、朱珍、朱鎮明、朱万三、朱文、朱文達、朱明俊、朱明成、朱明大、朱明達、朱明定、朱林三、如堅、西何、成玉、成天保、全老、仲栄、百川、有定、汪元吉(汪吉)、汪水、汪淼、応世昌、応庭堅(応庭・庭堅)、応徳、応芳、応友、何一清(何乙清)、何淵、何困、何炎大、何海、何可大、何建、何浩、何光栄(何栄・何光・光栄)、何光大、何山、何思明、何寿、何心之(何之)、何崇果、何通、何汶、何文正、何右、志員、志圓、志瑩、志敬、志実、志就、志昇、志成、沈允、沈志瑩、沈祥、沈崇因、沈崇果、沈崇広(崇広)、沈崇證(崇證)、沈崇福、沈崇妙(沈妙・崇妙)「嘉禾」、沈成、沈兌、沈明證「優婆塞」、沈明勝、沈明福(明福)「霽川」、沈友聞、宋大明、杜良臣、伯秀、余昇、余生「建安、安康」、余仲祥(余仲)、李月洪、李升文(李文)、李汝用、李生、李仲文、李斗文、李文、李用、李用汝、李林、芦云山、呂明成、呂明茂、季文、金華子、金崇

源(金源)「武林」、金大有、金文宝、金友(今友)、金良(今良)、銳「僧」、吳崇通(吳通・崇通)、吳良、周寅銓、周寅佺、周仁、周銓(周佺)、松年、昌明成(明成)、宗仁、范永果(范果・永果)、范応剋、范応就、范応彪(范彪)、范応龍、范華、范山、范子榮、范子華、范乃、范大、范彪、范「古杭」、冥榮、明隱、明永、明瑩、明可、明義(僧義)「僧」、明珙、明瓊、明堅、明春、明俊、明勝、明淨「僧」、明真、明祖、明宗、明聰、明訂、明騰、明瑩、明茂、明悠、明理、明玘「僧」、孟虎、林晟、林盛、林茂、為壽昌、姜思真(思真)、姜師真(師真)、姜崇行(姜行・崇行)「加禾」、姜崇真、姜道人、姜万七、姜明真、洪福、思温、思義、思秀、施十六(十六)、施崇心、施崇性、施明進(明進)、俞永春、俞貴、俞聲(俞声)、俞崇玘、俞崇珪、俞崇珠、俞崇勝、俞崇理、俞明圓(俞明員・明員)、俞明珪、俞明珪、俞明春「優婆塞」、俞凌遠、姚明怡、袁玉、翁王祥、翁康、翁智康、翁天祐(翁祐)、郭師周「◇陵」、郭世昌、桂堂、高琚、高玘、曄明、徐維、徐英、徐永、徐榮貴、徐榮祖(徐榮・榮祖)「◇華」、徐堅、徐児、徐秀、徐松(湖徐)「霅川・湖」、徐進(婺進)、徐仁、徐嵩、徐遜、徐遜老、徐得榮(得榮)、徐得炎(得炎)、徐德卿、徐伯玉(徐玉・伯玉)「婺、金華」、徐文、徐文貴、徐宝、徐余、徐困、真人、真道、秦明入(秦入・明入)「平湖・姑蘇優婆塞」、孫沆、孫賓、孫劉、馬道、馬明嚴「優婆塞」、馬明勝「優婆塞」、馬明晉(明晉)、馬明用、峯友、浴繆、凌桂、凌潤、凌忠、凌懋德(懋德)、凌茂「古杭」、郭永、許四、許崇進「霅川」、黃自忠(自忠)、黃宥、章倚、章応伸、章応仏、章伸、章進、章暹、章宣、章德祥、章文興、章文俊、章文富(章富)、紹遠、葉厦、葉元吉、葉子榮(葉榮・子榮)、葉子秀、葉子明(子明)「柯山」、葉汝沐「柯山」、葉清、葉仁玉(仁玉)、葉太玉(太玉)、進之、崇允、崇瑛、崇果、崇玉、崇源、崇広、崇春、崇俊、崇祥、崇心、崇信、崇進、崇成、崇宣、崇福、崇宝、崇理、崇礼(新戒礼)「比丘、僧、新戒」、崇玘、曹必貴(曹貴)、張阿慶、張一之、張寅佺(張佺)、張興、張興祖、張思恭(張恭・思恭)「永嘉」、張子良(張良・子良)、張仁甫、張崇立(崇立)、張正、張生、張千、張善慶、張中、張珍(張环)、

張定、張文、張文貴、張万、張明定(明定)、張明有(張宥·明宥)、張佑、張佑孚(佑孚)、張立、張礼「永嘉」、陳永、陳榮、陳王、陳玉、陳玉泉、陳昕、陳圭、陳子、陳思、陳弘圻、陳思義(思義)、陳日新(陳新)「德清」、陳重榮、陳昌、陳震、陳政、陳正、陳德懋、陳必達、陳復新、陳文宝、**陳邦卿**、陳茂、陳「德清」、**務云甫**、理一山、陸日新、梁元中、梁貢甫(梁貢補)、梁中、貴升、敬齋、寔榮、褚実、董大用(董用·大用)、費壽、費崇珂(弗崇珂·費珂·珂道人)「秀溪」、費崇政、費明珂(費珂·弗明珂)「菱湖、秀溪、雪川」、費明政(費政)、普壽、圓鑒、賈友、詹(占)玉、詹(占)過、詹閏、**楊益**、楊崇慧、楊崇宝、演孫、虞良忠(虞良·虞忠·于良)、蔡応龍、蔡刻「広徳」、蔡澄、蔡德甫(德甫)、蔡文、蔡文道、蔡明入、蔡龍、蔡「桐川」、錢拱之、錢淳祖、錢大有、趙乾、趙秀、趙祥、趙崇孟、趙生、趙必堅(趙必·趙堅·必堅)、趙普、趙良貿、婺翁、婺徐、聞貴、潤良、鄭清、鄭堯◇、鄭傑、鄭元壽、鄭濟、鄭清、鄭文、鄭滿、鄭埜「三山」、鄭林、滕演、滕演孫、滕子京、滕自男、滕濱孫、滕文、滕文翁(文公)、潘子岩、潘崇慶(潘崇·崇慶)、潘明昶(明昶)、潘佑(潘右·潘宥·潘祐)、潘倫(潘倫·番倫)、劉拱辰(劉拱·劉辰)、劉圭、劉桂、劉仁、劉仁仲、劉崇宣(劉宣)、劉万三、劉万二、劉友才、濮宗(卜宗)「雪川」、濮道(卜道)、嚴愛、嚴崇仁(嚴仁)「烏鎮·烏青鎮·雪川·優婆塞」、嚴崇成(嚴成·嚴晟)、嚴千三(嚴千三道)、嚴大「雪川」、嚴道仁、嚴文昌、嚴明仁、嚴明崇(僧明崇)「小沙弥僧」、謝杞、鍾◇昇、鍾升、繆「谷水」、韓玉、韓良王、韓良玉、雙溪、鎮嚴、蘇潤、顧虔、顧志、顧震